

平成28年12月2日

三浦市議会議長 岩野 匡史 様

都市厚生常任委員会

委員長 石橋むつみ

平成28年度 都市厚生常任委員会行政視察報告書

1. 視察日程

平成28年11月8日（火）、9日（水）

2. 視察地

岩手県紫波町及び岩手県花巻市

3. 視察参加者

都市厚生常任委員会

委員長 石橋むつみ

副委員長 出口 眞琴

委員 下田 剛

委員 布川 照美

委員 神田 真弓

委員 出口 正雄

随 行 岡部 隆二（事務局）

4. 視察事項

◇ オガール紫波(株)

「オガールプロジェクト」について

- ・ 公民連携によるまちづくり
- ・ 循環型のまちづくり・市民協働からオガールプラザ、図書館など

◇ 岩手県花巻市

「子育て支援」について

- ・ 花巻市就学前教育プログラム：0歳からの健やかな成長を目指して
- ・ 花巻ママハウスについて

【11月8日(火)】

■岩手県紫波町の概要

- 面積 238.98km²
- 人口 33,500人（H28年8月末日現在）
- 世帯数 11,774世帯（〃）
- 市制施行 昭和30年4月に、1町8村が合併して紫波町に。
平成の大合併で、単独町制を選択。
- 農業基幹のまち

岩手県の内陸のほぼ中央、東西に長い地形。まちの中央を北上川が貫流し、広々した平地が広がる。循環型農業。県内トップの蕎麦と果樹、全国有数のもち米。食料自給率は170%。産直のまち。南部杜氏の発祥の地でもある。

- 都市的要素も併せ持つ

JR東北線の駅が3つ。

国道は、まち中央部を4号線、東部を396（一部456）号線の2本が縦断。東北自動車道の紫波ICがある。

高齢者世帯の割合は16%。昼間人口は85%、盛岡広域圏内で最低。



「オガールプロジェクト」について

- ・ 公民連携によるまちづくり
- ・ 循環型のまちづくり

■ 視察の目的

循環型のまちづくりに始まり、市民協働、公民連携を模索して現在の【オガールプロジェクト】に至る経過を見聞し、その中で果たす市民や行政の役割、行政の構想の熟度などを知る。

■ 視察先対応者

紫波町議会産業建設常任委員長	藤原修一氏
紫波町企画総務部企画課公民連携室長	鎌田千市氏
紫波町図書館司書	手塚美希氏

■ 視察訪問先

紫波町役場庁舎
官民複合施設オガールプラザ
オガール広場と屋外通路、紫波マルシェ、カフェ、紫波町図書館
オガールベース
バレーボール専用アリーナ、民間複合施設としてのホテル、店舗など

■ 事業概要

オガールとは【成長】を意味する紫波の方言【おがる】と【駅】を意味するフランス語【Gare(ガール)】を組み合わせた造語。

紫波中央駅前を「紫波の未来を創造する出発駅」とする決意と、このエリアを出発点として、紫波が持続的に成長していく願いを込めたという。

H12年からの「循環型街づくり」では、藤原前町長の「100年後の子どもたちに、この環境を残す」という理念のもと、①有機資源循環、②森林資源循環、③無機資源循環に取り組んでいる。

H17年からの「協働のまちづくり」では、①市民が主役の自治の仕組みづくりとして、【市民参加条例】をH20年4月に施行し、また、②市民の公益活動の環境づくりとして、まちづくりコーディネーター養成講座、地域づくり活動補助金などの施策を行った。③地域課題に取り組む地区コミュニティ

づくりでは、1町8村で「地区創造会議」を実施した。

H19年からの「公民連携によるまちづくり」では、3つの行政課題

- ① 紫波中央駅前の未利用町有地 10.7ha
- ② 役場本庁者の老朽化、分散している庁舎
- ③ 図書館新設の要望

の解決に取り組む。その糸口になったのは、①藤原前町長のリーダーシップ ②PPPを担うキーマンの存在 ③財政問題（H19 実質公債費比率 23.3%）④PFI事業の実績 ⑤東洋大学大学院との協定 などであった。

未来にわたって人、素材、文化、資金が循環するまち、のコンセプトのもと、紫波町 PPP 推進協議会（委員 23 名は農商工関係者と町民、行政）が、町民の意向調査や民間企業意向調査を行った。情報提供のため PPP 用ホームページも立ち上げた。町民意見交換会は2年間で100回にも及んだ。

H21年2月、「都市と農村の暮らしを愉しみ、環境や景観に配慮したまちづくりを表現する場にします」との理念を掲げ、紫波町公民連携基本計画を策定。6月には、オガール紫波株式会社を設立。

町とオガール紫波(株)は構想の段階から、①市民の意向と②市場性を把握し、事業計画を共同で立案するとしており、設立時こそ町長が代表取締役で、町が100%出資していたが、2年後には、町の出資割合は39%で、(株)紫波まちづくり企画、岩手中央農協、(株)岩手畜産流通センター、(株)テレビ岩手や地方金融機関、個人などが株主となっている。

H22年にはオガール・デザインガイドラインを策定しデザイン会議を設置した。清水委員長が「5年後、10年後のまちの姿を考える。敷地に価値があるのではなく、エリアに価値がある」と述べたそうだが、この地域の地価公示価格は3.8%上がっているとの報告があった。

H23年4月 岩手県フットボールセンター

H24年6月 オガールプラザ（図書館、地域交流センター、子育て支援センター、産直紫波マルシェ、医院、飲食店、塾、事務所など）

H24年～25年 オガール広場

H25年10月 オガールタウン分譲開始（紫波型エコハウスなど建築条件付分譲、オガールタウン景観協定）

H26年6月 エネルギーステーション

H26年7月 オガールベース（日本初のバレーボールアリーナ、ビジネスホ

テル、コンビニほか)、オガール大通公園

H27年5月 役場庁舎(町産材・地域熱供給活用、国内最大級の木造庁舎)

H28年12月 オガールセンター(仮称・町教育サポートセンター)整備予定

H29年4月 仮称・紫波中央駅前保育所整備予定

・・・今も、オガール地区の土地利用と施設整備が進んでいる。

H27年度の実績

オガールプラザ情報交流館来館者数

36.3万人(うち、図書館来館者数 20.6万人、図書貸出冊数 252,151冊)

紫波マルシェ

レジ通過者数 32.1万人、売上げ 5億46万円。

定住人口・・・400人増

交流人口・・・94万人増

雇 用・・・200人確保

H27年度からは、旧町役場などのある日詰地区について
リノベーションまちづくりに取り組んでいる。





■主な質疑

<人口について>

Q 400人増えたというが、どのような人が、移住してきたのか。県外からか、町の中の移動なのか。

A 産業と雇用が少なく、地理的にも盛岡と北上の中間にあるので、紫波町はベッドタウン。昼間人口は夜間の85%と、かなり低い方。

県内に勤務する公務員（県や国の公務員・警察、教員など）が紫波町を選ぶことが多い。

盛岡や北上に家を構えてしまうと、県内異動でも単身赴任となってしまいが、紫波町ならどこらにも通える。緊急時に何分以内に職場に・・・などという事にも対応できる。

公務員の方、県内を転勤される方が多く、オガールタウンに住んでいる。

また、紫波にゆかりのある方が首都圏から越されてくる例もある。

<病院について>

Q オガールプロジェクトには様々な施設が含まれるが、健康について・・・病院などは考えられているのか。

A オガールプラザに眼科と歯科が入った。医師会との調整がなかなか大変。

日詰商店街はにぎわいもあり、交通量も多く、高齢者の方が行く。

オガールには今までなかった医療機関が入った。

<指定事業者について>

Q 指定事業者と町の関係は。

A 町が制定するのは実施方針。こういうまちを目指す、こういう民間事業に投資して頂きたいといった話をする。オガール紫波に民間活力誘導業務があり、市場調査をかけ、この業種で来てほしいということをやめ伝え、ヒアリングし、方針を把握してもらい、その業界のみに報告いただき、それをもって実施する。

<その他>

A 建設コストについて。

Q オガールタウンのエコ住宅の建設費は、坪60万円程度。住民は20代後半から70代前半まで、様々な年代の人がいて、必ずしも同世代の方が購入しているわけではない。

A 岩手県フットボールセンターについて

Q クラブハウスの中に公益社団法人岩手県サッカー協会の事務所を置いているが、利用料・使用料は一律であり、協会への優遇はない。

稼働率については、平日の午前中はほとんどいない。平日は夜が大半。

A 民設民営の保育所について

Q 保育所は4つあるが、1つは山間部にあり、実質3つ。

民営化が遅れており、公設公営が多い。120人定員の公設の保育所を廃止して、来年、新設する。

【11月9日(水)】

■岩手県花巻市の概要

- 面積 908.39km²
- 人口 98,351人（平成28年4月）
- 世帯数 36,665世帯（〃）
- 市制施行 平成18年1月1日（旧花巻市、大迫町、石鳥谷町
東和町の1市3町の合併）
- 産業別 第1次産業（13.15%） 第2次産業（26.0%）
第3次産業（58.6%）
- 岩手県のほぼ中央、北上平野にあり、県を代表する豊かな自然環境と豊富な温泉郡を有している。宮沢賢治、萬鉄五郎などの先人を輩出し、ユネスコ世界無形文化遺産登録の早池峰神楽、鹿踊りや南部杜氏の伝統技術など多彩な文化が伝えられているまち。
- いわて花巻空港、東北新幹線、東北自動車道、東北横断自動車道など圏内の高速交通網の拠点でもある。



「子育て支援」について

- ・花巻市就学前教育プログラム：0歳からの健やかな成長を目指して
- ・花巻ママハウスについて

■視察の目的

家庭、地域、幼稚園、保育園、学校、行政、事業所などが一緒になって進める花巻市の子育て支援と、地震被災地の妊産婦支援に始まり、ママたちの自立を支え、保育や相談事業を通じ、人にやさしいコミュニティ拠点となっているママハウスの活動を学ぶ。

■視察先対応者

花巻市議会副議長	藤原晶幸氏
花巻市教育委員会教育部こども課長	高橋 靖氏
花巻市議会事務局主任	金澤 健氏
特定非営利活動法人・母と子の虹の架け橋 理事長	若菜多摩英氏

■視察訪問先

花巻市役所
母と子の虹の架け橋・ママハウス

■事業概要

・子育て支援について

乳幼児期は、基本的な生活習慣を養い、心情・意欲・態度・コミュニケーション能力など、人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期です。0歳から人として尊重され、生きる喜びを感じながら成長していくことが、その後の望ましい生き方につながることを認識し、社会全体で力を合わせて乳幼児の健やかな成長を支えることが必要と考えます。



このプログラムは、花巻市総合計画、第2期花巻市教育振興基本計画の『「郷土を愛し、丈夫な体と深い知性を持つ心豊かな市民が育つまち」～すべての市民が学び合い、たくましく生き抜く強さと、思いやりの心を育む“人づくり”をめざして～』を受けたものです。すなわち、市としての就学前教育のありかたを示し、家庭、

保育園(認可外含む)・幼稚園・認定こども園・小学校、地域での取組を具体化することにより、心身ともに健全な子どもの育成をさらに推進するために作成したという。

子育て支援部門と教育委員会の連携を進め、段階を経て、教育委員会教育部のこども課に一本化して来た。その経過の説明を受けました。

「イーハトーブ花巻子育て応援プラン」とは、花巻市の子ども・子育てに関する総合計画とも言うべきもの。次世代育成支援行動計画・21 イーハトーブ花巻子育てプランの内容を引き継いだものとのこと。

花巻市の子どもを取り巻く環境、施策の体系、保育・教育施設一覧、地域子ども・子育て支援事業について資料を基に説明を受けました。

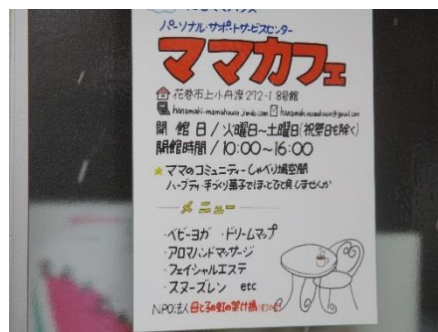
・母と子の虹の架け橋・ママハウスについて

3. 11 被災妊産婦ケア事業をきっかけに、その年の9月、地元の行政・NPO などの協働で母と子の心身のケアを行う「ママハウス事業」を展開。さらに翌年、お母さんたちの自立・就労支援、学びを支えるため託児事業「虹の家」を開設し、4ヶ月後には法人格を取得した。

県の助成を受けてのシングルマザーと子の支援事業「ひまわり」を行い、一時預かりの「虹の家」は小規模保育所「ベビーホーム虹」、「虹の家」へと発展した。

花巻ママハウスの「女性相談室」は、女性の生き辛さの克服・改善と子どもの成長・発達支援の役割を担っている。

女性は、相談を通じて共に歩むことに気付き、人を支援することで地域を知り、そして、人と人との繋がりが地域のセーフティーネットになる。今年度は市の委託事業になっている。



■主な質疑

花巻市役所

<教育委員会から市長部局へのシフトについて>

A 特に、公立の幼稚園は教育委員会サイドで運営していたが、それ以外は市長部局で運営していた。市長部局から教育委員会に最終的にシフトするまでに2段階あった。

公立の保育園について教育委員会サイドで管轄、運営をしましょうというのが一段階目。

そこから、子育て支援関係の部局が教育委員会に移管したのが2年前の26年度。

概ね6・7年かかった。

その間、特に保育園は、公立は教育委員会、法人立は市長部局での窓口運営ということであった。

まずは公立でそういった取り組みを進めていけば、市全体に広げる先駆にはなるだろうということで取り組んできた。2年前に法人立の管轄を含めた窓口を教育委員会へ持っていったことによって、就学前教育プログラムを全市的に取り組むことができるようになった。

市長部局に窓口があった段階では、どうしても法人立との関係は弱かった。

<市民サービスについて>

A 窓口は教育委員会のこども課。市民の方の対応は庁舎一ヶ所では厳しいので、窓口は分散させ、例えば入所の相談など、市民の手続等は3つの分庁舎で受けることができる状態にある。

<病児保育について>

A 現在は、準備段階。非常に難しい状況にある。先生方の支援が必要であり、また、保育所のように定期的なニーズがはかれないこともあって、二の足を踏む状況。

保育所でも、普段預かっている時に調子が悪くなった場合には取り込まれている。

しかし、あくまでも預かっているお子さんが対象で、病気は回復したが都合で預けたいお子さんなどには対応できない状況にあるので、ここまでは至っていない。

働きかけはしていたが、施設の問題、人員の確保、ニーズとの関係で、法人でやるという話にならない。市の方では、29年度に事業をすすめるように準備している。

場所は、どこかの一軒家を借りて、そこで実施することを考えている。

病院との連携が望ましいが、当市は総合病院があるが小児科は休止している。小児科の開業医は4件あるが、開業医では難しいということなので、できれば開業医の支援をいただきながら、ただ、建物は独立した形の中で、預かるという体制が取れないかというところ。

<第3子以降の保育料の負担軽減について>

A 幼稚園・保育園、いずれも、当該年度の小学生以下の最年長者を第1子と数え、第3順位以下にある児童の保育料の2分の1を補助。

<母親の引きこもりについて>

A どこに、そういった母子がいるということは子どもから把握できるが、引きこもり状態かどうかについては全てを把握できるわけではない。

乳児健診や定期健診で把握は出来る部分があるので、子どもセンター、支援センターへの参加の働きかけ、また、任意の団体で子育て支援のサークルがあるので、そちらへの参加の

働きかけを行っている。

<公立・法人の教育方針について>

A 法人立はその園特有の取組がある。

就学にあたり、最近、体力がなくなったという話がある。

基本的な体力、例えば、長く座っていることなど、学年が上がるにつれ、そうした傾向があるという話がある。就学前の体づくりが大事なのではということで、公立では一体で、法人立では様々な形で体づくりに取り組んでいる。

また、学校に上がるときには、各幼稚園、保育園から、それぞれのお子さんの特徴・特性を申し送りするシステムが出来上がっている。

<出産祝金について>

A 出産祝金はない。

<保育園の民営化について>

A 公募はしたが、募集先、応募できる法人を、市内で実際に保育園・幼稚園を運営している社会福祉法人に限定した。

規制緩和もあり、制限をしないと、実際に運営を始めた時に、現在通っているお子さんも通う可能性があり、今回の民営化にあたり、少なくとも数年間は今現在の公立の保育方針を維持してほしいという条件を付けた。そうすると、現在市内で運営している法人の方が、中身を理解していることもあり、地域としてもまた、保護者も受け入れやすいという判断をした。

今後も民営化を考えているが、地域での定員に充足していない保育園もある。ニーズがあるかという点と厳しいところもあり、統合もあり得る。

<就業場所の確保について>

A 市内に工業団地が4ヶ所ある。市内の就労者のうち、一番多いのは第3次産業。そうすると、工業団地だけでは、むしろサービスの方に努める方が多い。

結構な数は市外に出ていると思う。環境作りは大事。

<病院について>

A 総合病院の産科は休止中。開業医は2つ。総合病院は3年後に市内に移転の計画をしており、休止にしている診療科も再開したいとは考えている。

<保育士・保健師について>

A 保育士については、正職員4割、非常勤6割で、保健師は充足しているとはいいがたい。

保健センターが1ヶ所あり、市民の基本的な健診等を行う保健師はそちらへ配置している。ただ、そこでは、子どもから大人まで幅広く業務を行い、また、保健師のニーズの高まり、それ以外に高齢担当、障害者担当、子育てなどで分散している保健師もいる。

市内全地域を対象とする保健師が、専門分野で分散しているので、手が回らない状況がある。

非常勤が担任を持っているケースがあるが、非常勤は期限があるので、通年、数年に渡っての担当ができず、子どもの育成に芳しくない。

正職員率を上げないといけないということも、民営化の目的ではある。正職員は、民営化

になる3園にもいるが、残る12園に再配置することで正職員率を高められる。

合併前は、保健師はそれぞれの市町で配置され、保健センターもそれぞれあった。今は大分集約され、各地区の総合支所3つに2人ずつ配置されている。普段の健康相談はそちらで受け持つ体制をとっている。人が集約され、普段いる人数で、全部は賄いきれない状況にある。

ママハウス

<東日本大震災での対応について>

A 避難所生活における妊産婦の居場所が課題であった。授乳する場所等について話を聞いてもらえない状況があったことなどがきっかけで、妊産婦のママさんたちを支援することから始まった。

今は、独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興女性事業【子育て・家事支援サポーター派遣事業】、特定非営利法人 母と子の虹の架け橋【花巻ママハウス】へと発展している。花巻市・花巻市教育委員会・花巻市社会福祉協議会の協賛を受け女性弁護士の協力で【女性なんでも相談】にも取り組んでいる。

行政視察の成果について

行政視察を終えて 都市厚生常任委員長 石橋むつみ

生ごみの堆肥化、資源循環型まちづくりなどのキーワードで、十数年前から【紫波町】という名前が印象に強く残り、折に触れて町の動きを追いかけてきました。最近、【オガールプロジェクト紫波・未来にわたって人、素材、文化、資金が“循環”するまち】【補助金に頼らない、公民連携のまちづくり】などの記事や情報を得て、視察対象として考えるようになりました。

紫波町・オガールプロジェクトは数少ないPPPの成功例といわれているとか。十何年も積み上げられてきた“循環型まちづくり”とプロジェクトの過程で、町の職員や市民がどのようにかわり、考え、行動をしてきているのか、行政(町)がまちづくり計画をどのように練り上げ、市民や事業者と、また庁内で情報交換をはかり、議論し、計画の熟度を上げてきているのかを知りたいと思いました。また、“民間事業者”が具体的にどのようなものかも合わせて聞きたいと考えていました。

前もって、オガール紫波KKから送っていただいた研修資料は、町の概要、プロジェクトの説明、公民連携による開発理念と考え方、オガールデザイン、施設紹介、

関連組織、地元地方紙・業界紙の記事、キーマンの紹介など多彩な内容で、予備知識を持って視察に臨むための大きな力になりました。感謝しています。

残念だったのは、日程がオガール紫波KKの定休日・火曜日になってしまい、直接オガール紫波KKの方の話聞くことが出来なかったこと、オガールインの昼の賑わいを見ることが出来なかったことです。また、11月なのに真冬のような寒さの日で、オガール広場の人影はさびしかったのですが、濡れた紅葉の色は綺麗でした。

代わって説明して下さった町役場の公民連携室長鎌田さん、図書館司書手塚さんには、丁寧な説明と、ご案内をありがとうございました。

まちづくりのしっかりした理念と、それを支える町の住民・行政の情報共有、議論、協働、それを、あきらめず粘り強く実行することが大事、と改めて感じました。

花巻では、ママハウスの若菜理事長が熱く語ってくださいました。

3・11の被災地・釜石での経験と対策に、今の事業が始まっているとのこと。困っているママさんたちを前に、何かしなければと、対応策から町の施策へ、一つ一つ、体を動かし、人を動かし、法人にまで発展させたということに、驚き、感慨を覚えました。しかも、施設の雰囲気は、気さくで、家庭的。

人と人とのしっかりしたネットワークが作られてきているのでしょう。

困っている方がたを見つめる眼、手立てを考える知恵と工夫と手、施策にしている力・・・ここで学んだことを、わが町でも生かさねばと思い帰ってきました。

また、今年には賢治生誕120年ということもあり、最後に、宮沢賢治記念館に立ち寄りました。花巻は賢治の生誕の地です。花巻のまちの色々なところ、様々な場面に賢治のゆかりのものを見つけました。施策の名前であったり、店の名前やお土産品の名前であったり、石碑や彫刻であったり・・・と。

宮沢賢治がこの土地の人々の中にこんなにも深く根付いているのかと、改めて驚かされました。

記念館の見学は、短時間で残念でしたが、あの時代に童話や文学だけでなく、地誌、地学、農学、化学、天文などじつに幅広く探求した宮沢賢治の足跡のほんの一部を垣間見ることができました。

紫波町とともに、花巻市も、またゆっくり訪ねてみたいと思っています。

二つのまちのみなさま、お世話になり本当にありがとうございました。

行政視察 報告

副委員長 出口 眞琴

視察1日目は、従来型の公共事業のあり方が問われる今、補助金に頼らない公民連携で地域活性化を進め、全国から注目を集めている岩手県紫波町の紫波中央駅前都市整備事業、オガールプロジェクトについて研修して参りました。

人口減少時代にあって、岩手県内では、数少ない人口をほぼ横ばいに維持する町であり、住民の多くが、盛岡市、花巻市、北上市などへ通勤していることなどから、昼間人口割合は約85%となっています。

紫波中央駅前開発計画の面積は、21.2ha、この開発地には現在、図書館、子育て応援センター、産直マルシェ、飲食店などがある「オガールプラザ」と、ホテル、バレーボール専用体育館を備える「オガールベース」、そして、町役場、さらには、現在57戸が建設されている住宅区「オガールタウン」があります。

商業施設や図書館があるオガールプラザ、宿泊施設のあるオガールベースなどには、年間80万人を超える方が訪れます。

「オガールプラザ」、「オガールベース」には紫波町産の木材が利用されており、施工は全て地元業者で対応しています。オガールタウンに建設される家屋には、紫波町産木材のチップを利用した暖房、給湯システムが採用されており、施設内の「産直マルシェ」の企画・運営には、紫波町住民が深く関わるなど、地産地消の考えが地域に浸透していることが感じられました。プラザ内の図書館には基幹産業の農業をバックアップする多くの情報や、施設内に貸しスタジオがあることから楽譜を揃えるなど、本を借りる理由を考えた図書の選定を行い、子どもたちや子育て世代の方たちにも利用しやすい施設となっており、さらには、開発地内に太陽光を利用した大規模なエネルギーステーションもあり、全施設を通じ循環型が具現化されていました。

この開発は平成10年に基本計画ができ、そこからオガールプロジェクトを推進するため、町長は壊れたテープレコーダーとご自身で言いながら、専門家の調査結果を踏まえ、住民へ計画の将来性を何度も繰り返し説明をされたと言いました。そのような中で、住民が一つになり、まちづくりに魂を込めた結果がオガールプロジェクトを成功に導いたものと考えます。

今回の視察では、民間活力との公民連携を町・民間企業・市民との協働を前提としたまちづくりに、多くの市民が参加し活発な市民活動が展開されているのが感じられ、また、町の資源を生かした環境型まちづくりは紫波町ならではの取り組みであり、大変学ぶことが多い、意義ある視察となりました。

2日目は岩手県花巻市の子育て支援についての視察です。

子育て支援は花巻市の行政組織の中で教育委員会子ども課の所管である事から、子ども課長より説明を受けました。

イーハトーブ花卷子育て応援プランは、基本理念として「子どもが 親が 地域が 育ち 子育てに喜びを感じるまちづくり」を掲げています。子どもの誕生から乳幼児期、小学生・中学生へと成長していく過程において、行政を含め居住する地域が様々な形で関わりを持ち、地域の子どもは地域で守り育てるという考え方を基本に地理的条件、人口、交通事情などの社会的条件、現在の教育・保育の利用状況や施設整備などを総合的に勘案して提供区域を設定し、また、「教育・保育に係る区域」は地理的・社会的条件などを踏まえ、保護者や子どもが居宅から容易に移動することが可能であること及び基盤整備上の柔軟性を総合的に勘案し、合併前の旧市町である花巻、大迫、石鳥谷、東和の4地域としています。

「地域子ども・子育て支援事業に係る区域」は各事業のサービス提供施設や機関の所在、相互連携などを勘案し、全市域、4地域、小学校区に分類しています。なお、設定区域を越えての各施設・事業等の利用が制限されるものではありません。保護者だけが子育てを担うのではなく、地域社会全体で支援していく体制を作り、子どもが健やかに育つ環境づくりを総合的に進めて行く取り組みとなっています。

子育てや育児不安についての相談、子育てサークルの指導、親子がくつろげる場の提供などを行っている地域子育て支援センターが市内に6ヶ所あります。

こどもセンターは、子育てへの負担感の緩和を図り、安心して子育て・子育てができるよう、子どものあらゆる相談への対応、自由にいつでも集える場所を提供しています。

ファミリー・サポート・センターは、子育てをお手伝いして欲しい方（おねがい会員）と子育てをお手伝いしてくださる方（あずかり会員）からなる会員制の子育て支援ネットワークです。

学童クラブは、保護者がお勤め等で昼間家庭にいない小学生の放課後生活を守るところです。子どもたちは、放課後児童支援員のもと、放課後から夕方まで（春、夏、冬などの長期休みは朝から夕方まで）遊んだり、勉強したりして過ごします。市内に18か所あり、約900名の児童が入所しています。子どもたちが生まれ育つ環境を家庭だけでなく地域や行政が連携し、子育てに優しい環境づくりを進めることが子育て支援の基本ではないでしょうか。

本研修では、各自治体が抱える課題である人口流出対策として、定住維持のためにも子育て世代が働きながら安心して子育てができるように、子育て支援の充実を目指し、子育て世代の目線で行政・市民も含めた地域全体の取り組みを学びました。また、子育て世代が抱える課題を、家庭・保育園・幼稚園・小学校、そして地域が連携し取り組むこと、保幼小の連携で保育・教育の充実、地域での子育て体制の構築を作り上げていく施策など、学ぶべき事が多くありました。

「花巻ママハウス」では、施設責任者の若菜さんから施設の設立や運営などについて、熱心に説明をして頂きました。

「花巻ママハウス」は、ママ友づくりや実家のように寛いでいただく「サロン活動」、女性の抱える問題に寄り添って問題の解決を行う「女性何でも相談」、子育て・家事の負担感軽減のための「サポーター派遣事業」の3事業を展開しています。

民家の一軒家を借り運営しており、中に入ると家庭的な雰囲気が感じられます。

この施設のコンセプトは、「“ふれあい”と“憩いの場所”として女性は誰でも自由に利用できる安らぎのスペース」です。館内では、サロンやキッズルームのほか、キッチンも開放しています。「コーヒーやハーブティー等も用意していますので、ぜひ遊びにお越しください。お友達と一緒にくつろぐのももちろんOKです」と気軽に利用できることを呼びかけていました。

疲れた時、体の不調な時、あるいは仕事で子どもを迎えに行けない時など、子どものお世話や家事のお手伝いをする『子育て・家事支援サポーター』事業や、女性の困りごとや生活の悩み、育児の相談を女性弁護士が相談を受ける事業など、女性の目線から見た子育て支援に取り組んでいました。

2日間の視察研修で紫波町・花巻市の関係者の方々には大変お世話になり、ありがとうございました。今回の研修を今後の議員活動に活かして参りたいと思います。

視察報告と感想

下田 剛

【オガール紫波】について

図書館の仕組みとして、老若男女に利用してもらえるよう多くの工夫がされています。三浦市でも郷土に関わる書物を置いています。紫波町図書館では、第1次産業が盛んな地域として、農業などに関する書物も一つのコーナーを設けて陳列されていました。また、どの職員さんも素敵な挨拶をされるのが印象的でした。

通常、図書館では静かにしなくてはならないという固定観念が働いてしまいが、ここにも工夫がされており、建物の中央よりすこし手前寄りに受付があって、そこが、小声なら話すことが出来るゾーンと静かにするゾーンの境目となっているので、小さいお子さん連れの来訪者も多くみられました。

図書館の雰囲気やイメージを変えることが、多くの方に利用をしてもらえる答えになるのではないかと感じました。

日本初のバレーボール専用体育館も見学しました。なぜバレーボールかということ、【オガール紫波】取締役の岡崎氏がバレーボールをしていたからだとのことでした。そこに遊び心もあり、実際、本年行われた岩手国体の選手のほとんどが所属しているチームのホームであるのも、町の活性化に繋がっているのではと感じました。

花巻・子育て支援について

まず始めに、教育委員会が0歳から就学前の教育プログラムを作成していること

が全てにリンクしていると感じました。教育の中で小中一貫や中高一貫とすることは、余裕を持って計画立てができるなどが利点となります。また、就学前から教育プログラムを一貫して教育委員会が発信できるのは、個人的に素晴らしい取組と考えます。一貫教育は利点ばかりではないとも考えますが、就学の際の申し送りなどがスムーズになることは大きな利点だと思います。

その中でも、保健師の確保や、人員確保などは課題だと思いますが、子育てしやすいまちを目指すのであれば、長所・短所をしっかりと理解して三浦市でもぜひ取り組んでも良いことだと感じました。

一番素晴らしいと思ったのは、子育てガイドブック。ボリュームは確かに多いと感じますが、この一冊があれば、こと済む内容だと思いました。なかなか部署や管轄の問題で何冊も調べないとならないのが現実ですが、ここも参考にすべき点だと思いました。

花巻・ママハウスについて

東日本大震災での教訓などの話を聞かせていただき、なかなか難しい取組だと感じました。特に、保育士の確保等が難しいということでした。全国でも保育士の資格を持っていても、現実に資格を生かして仕事をしている人の割合は意外に少ないと聞いたことがあります。資格を持っていても、現状では資格と関わりの無い業務をされている方に、ママハウスのような取組をもっと発信していくべきだと思います。

また、災害時を想定した取組については、様々な方面で、今後につながるのではないのかと感じました。

視察の感慨

布川 照美

感想の第一は、新幹線から乗り換えた電車の味わい。地方ならではの心遣い・・・例えば、座席・お尻の下の暖房の温かさ（熱かった位）、列車の扉の手動の開閉（寒いのとワンマンなとで）。他市に行きますと、いかに三浦市は都会向けの人間構成だったかと感じます。

純朴で心優しいふれあいがありました。あまり岩手から離れたことがないというホテル受付の若い女性とは、心打つ会話ができました。

私は豪雪の新潟で生まれ幼い時期を過ごしましたので、ぼた雪の経験から、岩手のサラサラ雪に見とれました。舞い落ちる雪の地面までの時間差は、幻想的でさえありました。

自治体での報告などは、他の委員方に任せ、肌で感じた感想です。

駅舎や駅まわりには人々の姿を見かけましたが、広い平野部を移動時の風景は、車も人もまばら。地元のみなさん、買い物などはどうなさっているのかと心配にな

りました。歳をとっても、車は手放せないのでしょうかね。

紫波町は、中央部分のまちづくりは進んでいるようですが、まちの東西は過疎が進んでいるのかも…。

花巻ママハウスでは釜石との関わり、震災後の状況などを聴きました。

つい数日前も東北で大きな地震があり、沿岸部には津波警報も出されました。

対応して下さった皆様方に心からお見舞い申し上げます。

花巻・子育て支援について

神田 真弓

11月9日、雪の降る中、花巻市役所に到着しました。

教育委員会子ども課長さんから花巻市の子育て支援のお話を伺いました。

市長の施策では、H21年度からH26年度まで、2段階に分けて、子育て支援関係を一本化したとのこと。就学前と就学後の教育を一体化し、全ての子育て支援関係の相談や窓口が一つになり、子ども課は教育委員会の中にありました。

まさに教育と福祉の連携がしっかりと実践できていました。

市民の方たちの利便性はもちろん、職員の方たちも情報を共有できて、スピードを持って対処できているという事でした。

三浦市でも、一日も早い、教育と福祉の連携ができる事を願います。

視察について

出口 正雄

公民連携によるまちづくり…オガールプロジェクトについて

循環型まちづくりには三種類、すなわち有機資源、森林資源、無機資源とありますが、中でも森林資源に関しては興味深く話を聞かせて頂きました。

コンパクトなまちづくりで人口増加はあるようですが、紫波町全体では、人口が年間100人ほど減少している現実がありました。

花巻ママハウスについて

子育て支援の説明や、震災時の避難所のあり方、共同生活の実態など経験の中での話を詳しく聴いて、女性から見た避難所運営、男性から見た運営の観点の違いを説明され、改めて考えさせられました。そこでは、女性がリーダーシップを取るポジションも必要だと感じました。